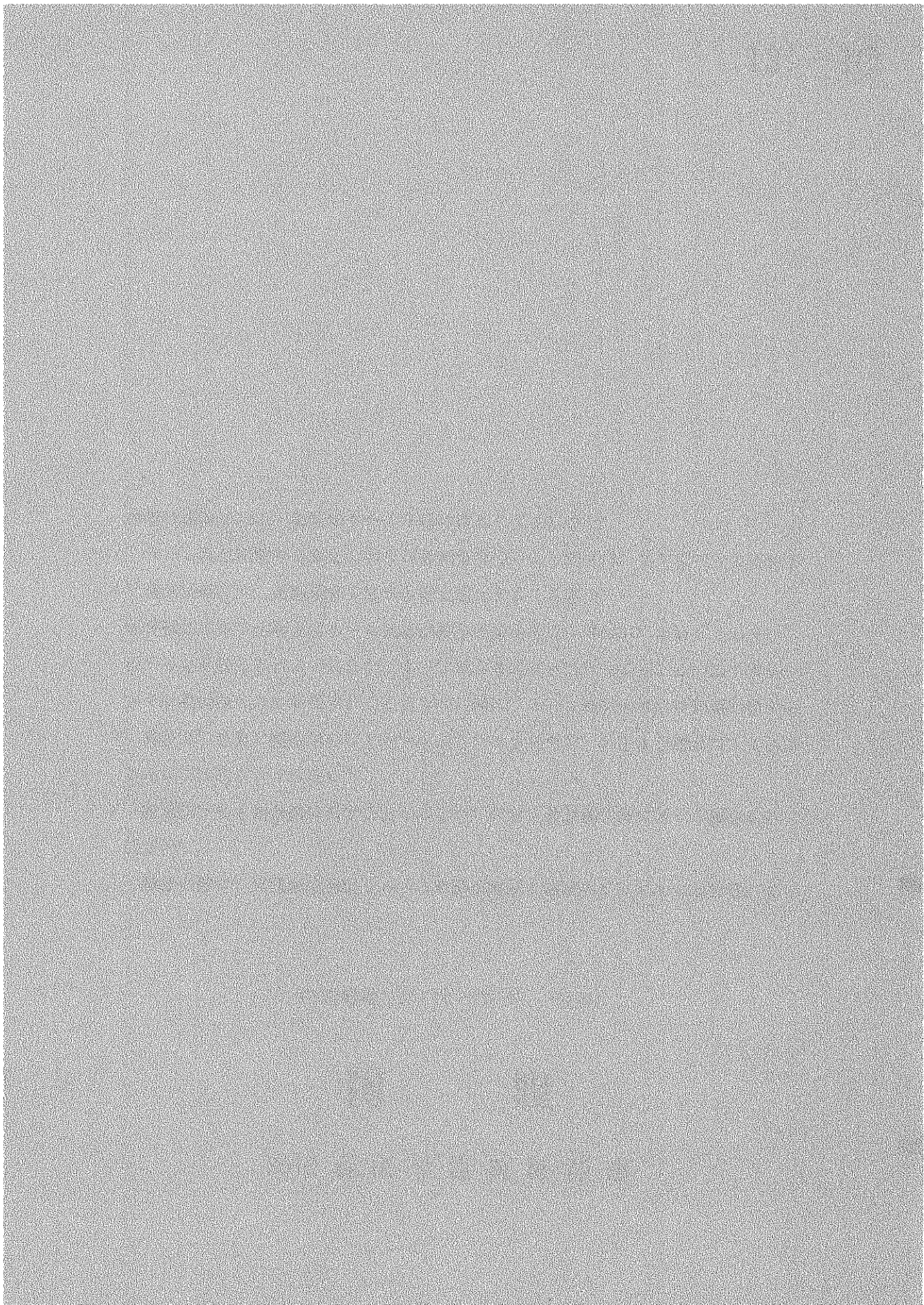


## 2015 年度 入学 試験 問題

# 国 語

(試験時間 14:50~15:50 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。



— 1 —  
次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

人のからだと言語との関係について、私がしばしば異常だと言わざるを得ないのは、なぜ食物セツシユ<sup>(1)</sup>の器官を、言語という極めて抽象的な活動をつくり出す器官としても共用しているのだろうかと思うからである。神様が人間を創ったのだとしたら聞いてみたい。どうして人間をこのように、へんなくあいに設計したのですかと。

これらのなぜは、ほとんど説明できないのではないだろうか。説明できないという点であきらかに人体は自然に属している。ことばが自然に属すると考えられるのも、ことばが、なぜこのようになってくるのか、たとえば日本語はなぜこのようにつくりになっているのかを説明できないからであり、それはちようどキリンの首はなぜあのように長いかを説明できないのと同様である。ことばについて何か人工の部分があるとしたら、それは文字だけである。しかしことばは文字をともなつて生れたのではなく、身ぢかにあるどこかの文字を借りてきて使うしかない。言語学がいつでも文字をとり去つて、文字以前のいわばハダカのことばを見ようとつとめることも、自然科学志向のあらわれである。

さて、ここまで考えてくると、ことばがどうしても自然物に見えてしまう理由がはっきりする。つまり、日本語の発音や文法がなぜこのようであり、あのようなでないかは、簡単には説明できない。すなわち理由づけができないのである。キリンの首がなぜ長いかを説明できないのと同様に、日本語が「人々を」となつていて、なぜ「を―人々」のような結びつきの順序、すなわち、助詞の前置ではなくて、後置をとるかを説明できない。こうした、ことばの自然、本来のその特性にもとづく分類は、動植物の分類のように安定して、有効である。

ところが、そうした変えられない自然に根拠を置きながらも、ことばとことばとの関係に、新たな状況を作りだそうと試みられることがある。その場合には、そのことばを話す人々の意図が介入し、ある目的に合わせようとする努力が試みられる。その目的と意図がはたらくのは、たとえばが自然物だとしても、そのことばを維持しているのは、そのことばを話す人々の集団、「言語共同体」の意志であるからだ。言語共同体は、ことばを決して

(2) のままにはほうっておかない。

あることが絶滅するということは、どんな点からみても残念なことである。それは、ことばの一つ一つが、ある集團の、民族的集團であれ氏族的集團であれ、それぞれの生活用具、生産の手段であるにとどまらず、考え方、生きかた、価値観をたくわえた財宝であるのみならず、さらにこれから先も、いろいろな作品をつくりだす力を秘めているからだ。

それら絶滅危惧種の言語の危機を訴える人たちは、危機度は示すことがあっても、保存の必要度について述べることはない。たぶん、それらひとしく危機にさらされている言語たちに、こっちの方がもっと大切で救わねばならないと差別を作ると、言語の防衛作戦に大きなひび割れができてしまうおそれがあるからだろう。それらはおしなべて、それぞれが対等に救われることを求めているのだ。だからここに保存の必要度のものさしを求めることは、この運動そのものを危機におとし入れてしまうかもしれない。これはいやなたとえだが、たとえここに十人のこどもがいて、やむをえず、その中の七人だけは残して、他はあきらめなければならぬとすれば、どの子をえらぶかという問題にも似ている。人間のこどもが、たとえとしてふさわしくなければ、十種類の鳥とか、草花だのにたとえてもよい。

生物種的な考えにたてば、たとえば、日本語のなかのある方言が減びるのは残念なことだが、とくに、その中で、民族的に、学術的に価値の高いものと、あまり特徴がなく、注目されず、やや「なまった」変種のようなものがあるとす。そうした方言が減びるのはまだ我慢できるとして、アイヌ語が減びるのは、より痛切な損失だと私には感じられる。

このように感じるのは、言語の分類上の学問的、職業的な評価がはたらいっているのであって、話し手の意識とはかならずしも一致しない。話し手にとっての大切さは、学問上の、主として系統分類上の貴重さとは別のものである。話し手にとってはことばそのものよりも、より文化的、政治的動機が重きをなしている。

しかし動植物と言語の分類とは、似ているようでいて、決定的なちがいがまだある。それは、たとえば分類される蝶ちょうには、自分ほどの仲間似ていて、どの分類項目に属しているかという意識がないのに対して、言語には、話し手の意識があつて、それがはたらくからである。いな、これはだいいじな点であるから、もつとていねいに説明しなければならぬ。

ある言語が、ある言語に近く、いわば方言的な関係にあるのに、別のある言語とはまったくちがうという意識があらわれるの

は、話し手である人間においてであつて、言語そのものがそう思うわけではない。

動植物が自らの分類上の地位を知らないのと同様に、言語もまた、自らがロマンス系だのゲルマン系だのと知っているわけではない。動植物においても言語においても、そのような意識はないので、その意味においては、どちらも「自然の存在」として考えることができよう。

しかし言語が生物と異なるのは、後者がそれじたいとして、人間とかかわりなく存在しうるのに、言語は、それを話す人間なしには自立した存在としてはあり得ない点である。

それにもかかわらず、言語学は、言語それじたいを、まるで自立したものであるかのような存在として扱ってきた。まるで話す人間がいなくても、存在したかのように。じじつ、消え去つた、二千年も昔の言語、粘土板に焼きつけられて残っている、シュメール語や、アッカド語などを扱う言語学者が、それをどんな人間がどんな社会で、話していたかということ、全く、あるいはほとんど考えなくても、粘土板の上に残つた文字から、言語そのものを考えるしかたは、ちやうど岩石の中に化石として残つた昆虫や花粉をとり扱うのと同じである。もつとも、昆虫や花粉のばあい、生物学者は言語学者よりも、はるかにそれらが存在した環境を問題にしたのである。この点では、言語学者は生物学者よりもより単純な確認で満足するつつましい人たちの(3)だ。

しかし言語のばあいは、そこにそれを話す人間がいなければ生れもせず、存在もしなかつたことは明らかだ。そして、言語を話す人間には、そこに複数の話し手からなる言語の共同体があるというのが前提条件である。たった一人だけの言語は存続しない。そもそもこれは、言語の存在の場であり、言語を支える場であり、これなくしては言語を研究することさえできないのである。しかしひとたび、そこから言語をとり出してしまえば、あとは用のない、むしろ言語そのものの研究にはじやまものとして捨て去られ、視野からとり除かれるのである。

ところが、近代に入つてから、にわかはこの言語共同体を考えに入れられないで、言語研究も行えない状況が発生した。それは、言語共同体が意識的に自らを包み込んでいた言語共同体から自らをはつきりと区別し、いわば、分離独立しようといふかまえを

見せる機会が増えてきたからである。

十九世紀ヨーロッパでは、さまざまな民族が、他の國家の支配から離れて、獨立の國家となる流れが湧き起こった。それに應じて、それぞれの國家は、かねてから、民族運動の中で育てられ、準備されていた、これらの母語にもとづく國語を創出した。その典型例は、ノルウェー語、フィンランド語、セルビア語、クロアチア語、リースランド語、ペラルーシ語などである。

これらの言語はもちろん、十九世紀になって忽然と現われたのではなく、それにさかのほる數世紀を通じて育てられていたものが、それぞれの民族・政治状況によって、一挙にオドリ出たのである。つまり母語としてはすでに存在していたものが、國家という言語共同体の言語になったのである。別のことはばはいえ、(2)のことはばが政治のことはばになったのである。

方言や民族語が堂々たる風貌をもつて現われるためには、それを母語とする言語共同体が、國家あるいはそれに準ずる政治体として昇格することが前提であつて、そのためには、これらの言語は「文章語」になつていなければならぬ。

ここで私の言う「文章語」とは何かといえ、(1)とははつきり區別されねばならない、近代の言語を論じる際に欠かせない概念である。

ふつうによく使われる「文語」ということは、現実に話されている日常言語とは、文法も語彙もおそろしく離れている、過去の歴史的言語である。それは數百年も過去に定まったキハンにもとづいているから、学校だの塾だの、特別の教育機関に行つて訓練しないと身につけることがむづかしい。それは日常語とは別の言語と言つてもいいくらいで、古典語の教養ある人だけに理解できる。日本では手紙に用いられたいわゆる「せうろう文」のたぐいがそれで、だれもかれも「せうろう、せうろう」としやべっているわけではない。近代以前では、(7)ができなければ、読み書きの世界に参加できなかった。そんな状態では、國民のすべてが共通の伝達共同体に参加できることを前提とする、國民國家の形成は不可能であつた。

近代國家は、それを支える國民を創り出すために、日常使う話しことばにもとづく書きことばを確立せねばならなかつた。この、日常語にもとづく書きことばのことを、私は「文章語」と呼んで用いてきた。

日本が明治に近代國家となるにあつて、外國語、たとえば英語を公用語として採用しようという意見もあつたが、それと同

時に「言文一致」の運動が起きて、「話すとおりに書く」、すなわち、日常の母語の知識で、基本的には書ける「口語」の運動が成功した。

「話すとおりに書く」ことは、原理的にありえないという人たちもいるが、この「話すとおりに」というのは、文語のように、いわば外国語のように特別の知識がなくとも、「口語」「話しことば」の知識を基本にして書くことができるという意味である。もちろん「書く」という伝統そのものが文語によって確立されたものであるから、(8)の確立は単純ではなかった。それは保守的なものから急進的なものまで、さまざまな段階のタイプがあつたが、結果的には「文語で書いたものは読まれない」という状況が生れてから、文語はプレスティージュを失つた。

「十九世紀になつて、多数の言語が生れた」というときの「言語」とは、この「文章語」のことを指している。この新しく生れた民族の文章語には、それ以前から、すでに文字に書かれていた言語もあれば、一度も、文字で記されたことのない言語もある。

すでに文字で書いた伝統を背後にもつ言語は、その過去の(7)と対決しながら、新しい(8)を創って行った。その際、一足さきに出発してすでに一定の成果をあげている他の近代諸語からも多くを学んだにちがいない。そうして何よりも、じつさいに口語を表わさなければならぬので、口頭で伝えられている叙事詩、メーテルヒェン、昔ばなし、おとぎ話のようなフォークロア、民間の口頭伝承作品などを参考にする必要から、その採取と研究が重要になつた。

この作業をセンク的に、典型的に行つたのが、ヤーコプとウイルヘルムのグリム兄弟であつた。かれらは民間に語りつがれてきた、生きた(10)コウヒを集め、それを基礎として辞書を編み、文法を作つた。コウヒの収集と文章語の成立とは不可分の関係にある。

〔田中克彦「ことばとは何か」による〕

〔問一〕 傍線(1)(5)(6)(9)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 空欄(2)(7)(8)にはそれぞれ異なる語句が入る。空欄(2)と(7)に入れるのにもつとも適当な二字の語句、(8)に入れるのにもつとも適当な三字の語句をそれぞれ本文中から探し出して答えなさい。

〔問三〕 傍線(3)「つましい」とあるが、この表現から読み取れる筆者の思いとしてもつとも適当なものを、左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 言語学者が粘土板上の文字のみを解明するという単調とも思える作業に没頭しているつましい姿を称賛している。
- B 言語学者が粘土板上の文字のみを丁寧に分析することで、古代の環境も解明しようとする一途な姿に感心している。
- C 言語学者が言語の使用されていた環境をかえりみず、ひたすら言語だけの研究に専念する慎重な姿を皮肉っている。
- D 言語学者が生物学者の領分に足を踏み入れず、言語の解明を地道に行おうとする控えめな姿を陰ながら応援している。
- E 言語学者が粘土板の文字しか資料がない厳しい研究環境の中で、言語の解明に打ちこむひたむきな姿を支持している。



〔問四〕

傍線(4)「近代に入ってから、にわかはこの言語共同体を考えに入れなければ、言語研究も行えない状況が発生した」とあるが、次の文ア―オのうち、こうした状況が発生した背景の説明として適當なものに対してはA、適當でないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア ある言語共同体で、支配を受けていた民族が支配から解放され、彼らの言語の存在意義も失われた。

イ ある言語共同体で、支配を受けていた民族が支配者に対する自立性を獲得し、彼らの言語の影響力も高まった。

ウ ある言語共同体で、支配を受けていた民族のアイデンティティが変化し、彼らは自分たちの國語を創り出した。

エ ある言語共同体で、支配を受けていた民族が展開してきた活動が奏功し、彼らの言語が新生國家の國語となった。

オ ある言語共同体で、支配を受けていた民族が置かれていた状況が一変し、彼らの言語の歴史的な連続性が断絶した。

〔問五〕

次の文ア―エのうち、本文の内容から導き出せるものに対してはA、導き出せないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア  $H_2O$  という化学式で表わされる物質に日本語では「水」という漢字が当てられるが、これは歴史的に見れば単なる偶然である。

イ  $H_2O$  という化学式で表わされる物質が日本語では「水」「みず」、英語では「water」とされるのは、それぞれの言語共同体の習慣であるからにすぎない。

ウ  $H_2O$  という化学式で表わされる物質は日本語では「mizu」と発音されるが、これは「満(みづる)」に由来しているからで、「mizu」と発音される理由の説明がつく。

エ  $H_2O$  という化学式で表わされる物質は日本語では「水」「湯」「氷」「雨」などと書き分けるが、これは日本人が豊かな洞察力ときめ細やかな感性を持っているためである。

〔問六〕 次の文ア、イ、エのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 動植物と言語とは両者とも自らがどのような分類項目（分類上の地位）に属しているかを意識していないという点で同じである。

イ バラがなぜ赤いのが説明できないように、人間の体の作りには元来目的などなく、目が後ろ側に付いていないことに合理的な理由があるわけではない。

ウ 絶滅の危機に瀕している言語を話す人たちは、自分たちの言語の学術的な価値に関心がないのだから、それが絶滅することにもさほど悲観などしていないだろう。

エ 方言はことば同様、生きかたや価値観をたくわえた財宝であり、いろいろな作品をつくりだす力を秘めているので、どんな方言が絶滅するのも我慢できないものだ。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

レヴィイ・ストロースは晩年のインタヴューなどで、彼がそれまでに執筆した膨大な著作について問われると、「私が自分の本を書くのだという感じを持たない」のだ、と答えることが常だった。自分の研究の成果たる著作は、自分の知らぬまに自分のなかで考え出され、書きとめられていたにすぎない。「自分」とは、そこで何か起きる場所ではあっても、意図を持って何かを恣意的に行う主体ではない。自己とは、ものが起こる(1)である。自分の本は、自分の身体や頭脳を通して書かれ、そこを通過して、どこかに去ってゆく。ちょうど、神話が、人間の知らぬまに、人間のなかでみずから思考し、神話として語られることで個人の創造から離れて集合的な生命を生きるように。レヴィイ・ストロースは、自分の著作をさらにこのような大胆な言い方で語りさえる。

本は、死んだもの、すでに終わったものです。私には無縁の死体のようなもの。本は私の体の中を通り過ぎてゆくものです。私自身は、数カ月、あるいは数年の時間をかけて、いろいろなものが自らを作り上げ、組み上げてゆく、その場所なのです。それから、その作り上げられ組み上げられたものどもは、まるで排泄物はいせつぶつか何かのように、私から離れてゆくのです。

(「遠近の回想」竹内信夫訳)

碩学せきがくが自らの長い半生を振り返りながら、自己形成史やその学問理論をティ・エイ・エリボンに親しげに語った対話『遠近の回想』は、レヴィイ・ストロースが八〇歳のときに刊行された自伝的回想録である。八〇年という長い時間の涯はてで、彼は自らの著作を自己アイデンティティの産物であることから追放する。自我という近代的な主体による占有や囲い込みの習慣から書物を解放する。彼の思考の対象であるインディオの神話群、それらが自らを語る「野生の思考」の体系、すなわち人間の思惟しゐの原形の場に働く構造的な理性は、探求の過程において、書き手である彼自身のなかを通過しながら自らを組み立て、その交差点のよ

うな場に束の間の鮮烈な星塵を書き込んでゆく。レヴィ・ストロースは、その瞬間ごとに像を結ぶ「野生の思考」の絵柄を、  
(2) な個人としてではなく、いわば匿名で集合的な交差点として受け止め、そこに投影された論理の絵柄を克明なデッサンのようにして描き出していく。「私自身は(……)いろいろなものが自らを作り上げ、組み上げてゆく、その場所なの」だ、  
という表現は、そのような特異な感覚のなかで彼の著書が生まれていることを意味している。

レヴィ・ストロースは、『神話論理』全四巻の叙述において彼が終始一貫して「われわれ」という主語を使いつづけた理由を、最終巻『裸の人』の最後に置かれた「終曲」でこう述べていた。「われわれと名のることにより本書の書き手は、匿名的思考に差し出された実体なき場所たらんとしている」と。ここでいう匿名的思考とは、神話の論理そのもののことである。そして、それが複雑に自己編成をとげながら人間の意識を満たしてゆくやりかたを著者はみずから実体なき場所として受け止め、その非主體的流儀をテキスト生成の行為において模倣する。レヴィ・ストロースは『裸の人』において、この匿名的思考が著者という場の時間的、空間的位相にさまざまな事象を生起させる状況を、天文学者や宇宙物理学者が宇宙の生成と膨張を理論づけるときの重力の特異点になぞらえながら、書物が、またその著者が、諸事象の交点にほかならないことを力説してゆく。

書物はいかにして生まれ、そのとき著者はどのような場としてそのテキストの生成に関わっているのか？ この神秘的で複雑なプロセスを、レヴィ・ストロースは『神話論理』のなかでしばしば反芻するよう<sup>はんすう</sup>に自省的に語っている。二〇年にもおよぶインデイト神話の探求のなかで、彼は神話の永久運動が示す語りの宇宙を、自分がそれを研究するときの言語の現われ方へと投影しようとした。『生のもとの火を通したもののなかのつぎのような描写は、神話の変異のメカニズムを語ったものでありながら、同時に、彼の書物が生成する秘儀的な過程を、まるで重力の特異点をめぐる宇宙論か、あるいは微視的な分子のミクロコスモスにおける現象として表現しているように読める。

しだいに混沌としたものが広がり、その核が凝縮し、かたちが整ってゆく。散らばっていた繊維が結びつき、欠落が満たされ、関連が成立し、混沌の背後から、なにか秩序のようなものがうつつらと見えてくる。まるで生殖する分子を取り巻く

ように、いくつもの変形のグループにまとめられたシークエンスが、いちばん最初のグループに組み合わさってゆき、その構造と将来のかたちのあり方を再生産してゆく。多次元的集合体が生まれ、その中心部は構造を示しているが、周辺部は不確定や混乱が支配している。

（『神話論理Ⅰ…生のものと火を通したものの』早水洋太郎訳）

これがレヴィストロースという「書物」の秘密の組成であった。であれば、そこに近代的自我による恣意と独占的所有の動機が介入する余地はない。この「多次元的集合体」は、まさに「わたし」という特権的な著者の存在を解体し、テキストを匿名的な運動性が充滿する交差点のような場へと変えてゆく。そしてその過程が終わり、書物が物理的な実体として完成したとき、それはもはや彼の子供ではない。いやはじめから彼は自らの子供を作ろうとしたわけではなかったのだ。著書はいまや「見知らぬ死体」のような気配を漂わせながら彼の目に奇異にさえ映る。あの豊かな運動のプロセスとそれが描いた星座は、彼のものとを通り過ぎ、排泄物のように去っていった。昂揚は、

(3) によって報われた。まるで、死を約束された人間の生涯のように。  
（今福龍太「にもかかわらず、（書物の）生を」『考える人』二〇一二年春号）による）

注 レヴィストロース……フランスの文化人類学者（一九〇八―二〇〇九）。シークエンス……連続するもの。

〔問二〕 空欄(1)に入れるのにもっとも適当な八字の語句を、本文中から探し出して答えなさい。（句読点、かつこも一字に数える）

〔問二〕 空欄(2)(3)に入れるのもっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- (2) A 能動的            B 自主的            C 理知的            D 孤立的            E 権威的
- (3) A 充足            B 休息            C 喪失            D 慰安            E 榮誉

〔問三〕 次の文ア～オのうち、本文の筆者の考えと合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア はてしない運動性のうちに生成してゆくレヴィ・ストロースの書物は、最終的な完成にいたることはない。
- イ 最古の物語としての神話には、それに携わる匿名的な主体の独自の思考が集合的な生命の中に刻印されている。
- ウ レヴィ・ストロースは、インディオの神話群が伝える「野生の思考」を自身の記述の形成に反映させようとした。
- エ レヴィ・ストロースによれば、彼の著書では著者と書物の所有・帰属の關係は解体され、自明ではなくなっている。
- オ 神話の変異のメカニズムに従って人間の思考は原始的な混沌と恣意性を失い、秩序と合理性を備えるにいたった。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

むかし、左兵衛の督かみなりける在原の行平といふありけり。その人の家によき酒ありと聞きて、上にありける左中弁藤原の良近まさちかといふをなむ、<sup>(1)</sup> まらうどぎねにて、その日はあるじまうけしたり <sup>(3)</sup> なさけある人にて、<sup>(4)</sup> かねに花をさせり。その花のなかに、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむあり <sup>(5)</sup> 。それを題にてよむ。<sup>(6)</sup> よみはてがたにあるじのはらからなる、あるじしたまふと聞きて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことはしらざり <sup>(7)</sup> ば、すまひけれど、しひてよませければかくなむ、

<sup>(8)</sup> 咲く花の下にかくる人を多みありしにまさる藤のかげかも

「<sup>(8)</sup> などかくしもよむ」<sup>(9)</sup> といひければ、「おほきおとどの栄花のさかりにみまそがりて、藤氏の、ことに栄ゆるを思ひてよめる」となむいひ <sup>(10)</sup> 。皆人、そしらずなりにけり。

(『伊勢物語』による)

注 三尺六寸……約一メートル一〇センチ。 あるじのはらから……在原業平。 おほきおとど……太政大臣藤原良房。

すまひけれど……いやといって断ったが。

〔問二〕 傍線(1)「まらうどさね」、傍線(2)「あるじまうけ」、傍線(4)「なさけある人」、傍線(6)「よみはてがた」の口語訳として、もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

(1) まらうどさね

	A	主人
	B	客人
	C	主賓 <small>しゅひん</small>
	D	珍客

(2) あるじまうけ

	A	宴会を聞いてもらうこと
	B	宴会の主人を決めること
	C	自宅で宴会を聞くこと
	D	宴会の客となること

(4) なさけある人

	A	人情に厚い人
	B	情趣を解する人
	C	たのもしい人
	D	用心深い人

(6) よみはてがた

	A	宴会が終わりそうなころ
	B	客の人数を数え終わるころ
	C	あるじが本を読み終えるころ
	D	皆が和歌を作り終えるころ

〔問三〕 空欄(3)(5)(7)(10)に、助動詞「けり」を正しく活用させて入れた組合わせとして、もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A	(3)	けら	(5)	けり	(7)	ける	(10)	けれ
B	(3)	けり	(5)	けり	(7)	ける	(10)	けれ
C	(3)	ける	(5)	けり	(7)	けれ	(10)	けれ
D	(3)	ける	(5)	ける	(7)	けり	(10)	けら
E	(3)	ける	(5)	ける	(7)	けれ	(10)	ける



〔問三〕 傍線(8)「などかくしもよむ」とは、「咲く花の……」の歌を人々がどのように受け止めたからか。その解釈として、

もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 業平が、藤原氏の庇護ひまをうける人々を批判したと思つたから。
- B 業平が、藤原氏の栄華を批判する和歌を詠んだと思つたから。
- C 業平が、藤原氏の衰退を皮肉つた和歌を詠んだと思つたから。
- D 業平がどうしてこのように歌つたのか、わからなかつたから。
- E 歌の内容と歌の題とが、どう関わるのかわからなかつたから。

〔問四〕 傍線(9)「おほきおとどの栄花のさかりにみまそがりて、藤氏の、ことに栄ゆるを思ひてよめる」とは、業平がどう弁明

しているのか。その解釈として、もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 太政大臣が絶頂のときに、行く末を心配している人々に共感して作つたと弁明した。
- B 太政大臣が絶頂のときに、藤原氏が格別に栄えている様子に感動して作つたと弁明した。
- C 太政大臣が絶頂のときに、嫉妬している人々の様子を嘆かわしく思つて作つたと弁明した。
- D 太政大臣の臨終のときに、悲しんでいる人々の様子に深く共感して作つたと弁明した。
- E 太政大臣の臨終のときに、行く末を心配している人々に同情して作つたと弁明した。

〔問五〕

左の文章の中で、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 在原業平は、このとき左兵衛の督であった。
- イ 藤原良近は、かめに花をさしてもてなした。
- ウ 在原行平は、この宴会の主催者であった。
- エ 在原業平は、行平のために進んで歌を詠んだ。
- オ 在原業平は、うまく弁明したので皆が納得した。